

第1部 基礎データ編

第1章 生活の様子

朝永昌孝（1～4節）

この章では、25～35歳の若者の生活全般の様子を、アンケートデータの結果から概観する。具体的には、日頃の生活時間や生活行動、友人や親、パートナーといった人々との人間関係、そして生活全般に対する意識や価値観をたずねている。結果からは、忙しい正規社員、家族とのかかわる既婚者、人間関係への評価が低い無職、満足感の高い専業主婦といった様子が浮かび上がってきた。性別や就業形態、結婚の有無などの状況が絡まりあい、生活上の行動や意識に影響を与えているものと考えられる。

第1節

日頃の生活時間

1. 仕事の時間 ～仕事時間と通勤時間～

1日あたりの仕事時間の平均は、正規社員が約9時間半、非正規社員が約7時間半、自営自由業が約8時間。なかでも男性正規社員が長い。就業形態を問わず、男性のほうが女性より仕事時間が長い傾向にある。

25～35歳の若者は、日々をどのように過ごしているのだろうか。本節では、時間の観点から生活の様子をみていこう。

はじめに、仕事時間である。生活の中で大きな位置を占める仕事。若者は1日にどのくらい働いているのだろうか。

● **仕事時間の平均は、正規社員約9時間半、非正規社員約7時間半、自営自由業約8時間**

有職者全体について、1日あたりの仕事時間をみると、平均8時間50分である。回答の分布をみると、3人に1人(33.7%)は「10時間以上」仕事をしている(巻末基礎集計表参照)。

仕事時間は、就業形態によって大きく異なると考えられる。就業形態別の仕事時間の平均は、正規社員では9時間29分、非正規社員では7時間27分、自営自由業では8時間02分であった(図表省略)。

● **男性正規社員は、過半数が1日に「10時間以上」仕事をしている**

就業形態ごとに、さらに性別で分けて仕事時間の違いをみたものが、図1-1-1である。これによると、もっとも仕事時間が長いのは男性正規社員で、平均は9時間48分であ

る。回答の分布をみても、「10時間以上」仕事をしている割合が51.4%と、過半数にのぼる。一方、同じ正規社員でも、女性正規社員だと、平均は8時間35分である。回答の分布でも、「10時間以上」の割合は17.7%にとどまり、「8時間台」の回答が45.5%と圧倒的に多い。

非正規社員と自営自由業の仕事時間の平均は、男性がいずれも8時間半程度、女性がいずれも7時間程度である。また、回答の分布も、男性に「10時間以上」が多い。

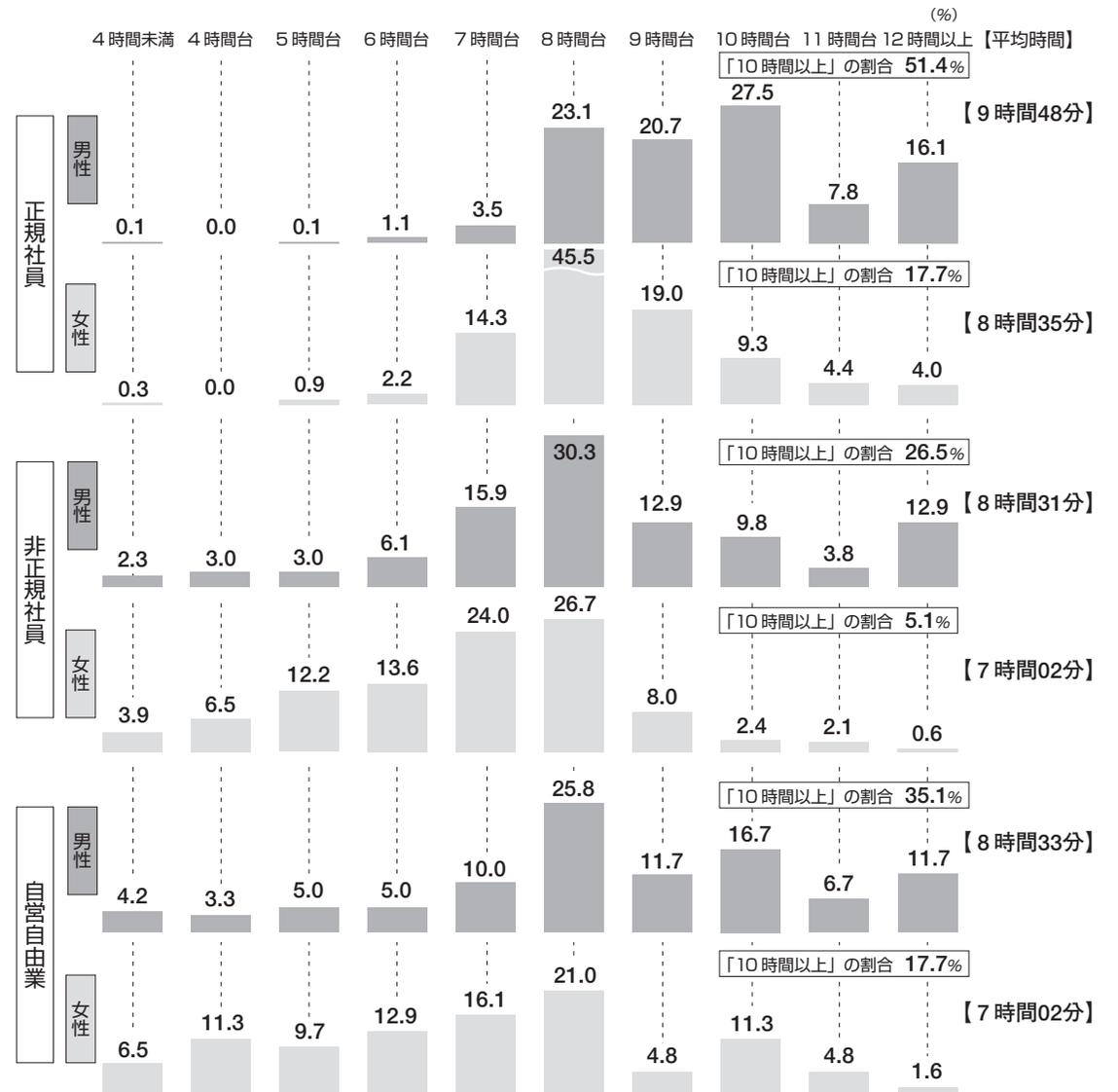
このように、仕事時間をみると、いずれの就業形態においても、男性のほうが女性よりも長時間仕事をしている割合が高いことが見て取れる。

● **通勤時間の平均は、正規社員41分、非正規社員37分、自営自由業23分**

通勤時間も日々の仕事をする上で必要な時間であり、他の生活時間を左右する見逃せない要因である。また、長時間通勤が精神的・肉体的な負担になる可能性も考えられる。

有職者全体ならびに就業形態別に、片道の通勤時間の平均を示したものが、表1-1-1である。これによると、正規社員が41分、非正規社員が37分、自営自由業が23分である。自営自由業では「0分(自宅勤務)」という回答が45.6%と多い。

図1-1-1 1日あたりの仕事時間(就業形態別×性別)



注1) 有職者のみ分析。
注2) 「4時間台」は「4時間」と「4時間30分」の合計を表している。他の時間帯も同様。

表1-1-1 通勤時間(片道)(全体、就業形態別)

	全体	正規社員	非正規社員	自営自由業
0分(自宅勤務)	5.7	1.1	1.7	45.6
15分	28.3	27.8	31.3	21.4
30分	23.6	24.1	28.8	9.3
45分	14.1	15.6	14.5	3.8
1時間～1時間30分未満	21.5	24.1	18.0	14.2
1時間30分～2時間未満	5.5	6.0	4.7	3.2
2時間以上	1.4	1.4	1.0	2.1
平均時間	38分	41分	37分	23分

注) 有職者のみ分析。

2. 起床・就寝時間、睡眠時間

若者全体の平均は、起床は7時すぎ、就寝は24時半すぎ、睡眠時間は6時間半程度。未婚者は既婚者よりも、起床・就寝時間が20～30分程度遅い。また、無職は、就寝時間が1時台と遅く、起床時間も8時台と遅い。

生活のリズムや体調を整える上で欠かせない睡眠。夜型も進む現代社会であるが、若者は何時頃に起床し、何時頃に眠りにつくのだろうか。

●起床時間の平均は7時07分、就寝時間の平均は24時33分、睡眠時間は6時間半程度

はじめに、全体の傾向をみてみよう。図1-1-2で起床時間についてみると、「6時台」と「7時台」に起床する若者が、全体の7割を占めることがわかる。起床時間の平均は7時07分である。

つづいて、就寝時間を示したものが、図1-1-3である。これによると、「24時台」に就寝する若者が28.0%でもっとも多いが、「23時台」および「1時台」も、それぞれ2割程度ずついる。合わせると、全体の7割が「23時台」から「1時台」に就寝しているようだ。就寝時間の平均は24時33分である。起床・就寝時間より計算すると、睡眠時間の平均は6時間34分である。

●未婚者のほうが、起床・就寝時間が遅い

性別ならびに既婚未婚別に、起床時間と就寝時間、そして睡眠時間の平均を示したものが、表1-1-2である。

まず、性別による違いである。起床時間は、男女ともほぼ同じ時間だが、就寝時間は、男性のほうが20分程度遅い（男性24時43分、女性24時24分）。その分だけ、睡眠時間が男性のほうが短くなっている。

次に、既婚未婚別でみると、起床時間も就寝時間もともに、未婚者のほうが既婚者よりも遅い（起床時間：未婚7時20分、既婚6時55分。就寝時間：未婚24時48分、既婚24時19分）。しかし、睡眠時間全体には、それほど大きな違いはみられなかった。

●睡眠時間の平均は、正規社員が6時間20分。無職は7時間18分

表1-1-3は、起床時間と就寝時間、そして睡眠時間の平均を、就業形態別に示したものである。

これによると、正規社員の起床時間だけが6時台であり、睡眠時間も6時間20分と少ない。有職者の間で比較すると、正規社員、非正規社員、自営自由業の順で、起床時間の平均も就寝時間の平均も、ともに少しずつ遅くなっている。

無職と専業主婦については、無職だけが就寝時間の平均が1時台と遅く、起床時間も8時台と遅い。睡眠時間も7時間18分と相対的に長い。一方、就寝時間の平均がもっとも早いのが専業主婦である（24時09分）。起床時間も正規社員に次いで早い（7時05分）。

図1-1-2 起床時間

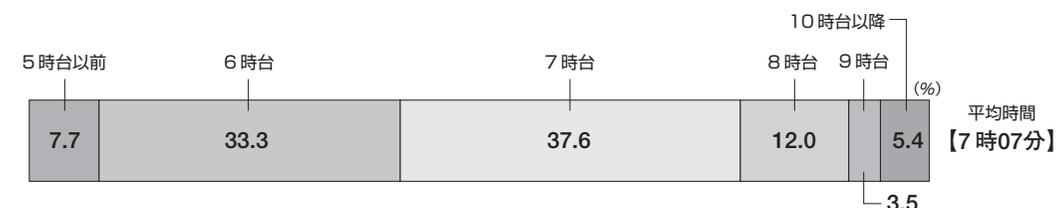


図1-1-3 就寝時間



表1-1-2 起床・就寝の平均時間、睡眠時間の平均（性別、既婚未婚別）

	男性	女性	未婚	既婚
起床時間	7時07分	7時08分	7時20分	6時55分
就寝時間	24時43分	24時24分	24時48分	24時19分
睡眠時間	6時間24分	6時間44分	6時間32分	6時間36分

表1-1-3 起床・就寝の平均時間、睡眠時間の平均（就業形態別）

	正規社員	非正規社員	自営自由業	無職	専業主婦
起床時間	6時52分	7時17分	7時39分	8時30分	7時05分
就寝時間	24時32分	24時44分	24時47分	1時12分	24時09分
睡眠時間	6時間20分	6時間33分	6時間52分	7時間18分	6時間56分

3. 余暇の様子

若者全体の平均では、テレビの視聴時間は2時間超、インターネットは2時間弱、家族との会話は1時間半弱。家族との会話時間は、男性未婚者はわずか30分。一方、女性既婚者は2時間12分。

日頃の生活の中では、さまざまな活動に時間を費やしている。前ページまでは、いわばパブリックな時間である仕事時間、そして生理的に必要な時間である睡眠時間についてみてきた。

ここでは、テレビの視聴やインターネットの利用、家族との会話といった、プライベートな時間の使い方についてみてみよう。

●平均では、テレビの視聴は2時間超、インターネットは2時間弱、家族との会話は1時間半弱

テレビの視聴時間、インターネットをする時間、家族との会話時間（電話を含む）は、若者全体の平均では、どのくらいなのだろうか。平均時間は次の通りであった。

・テレビの視聴時間	2時間12分
・インターネットをする時間	1時間51分
・家族との会話時間	1時間17分

しかし、こうした時間の使い方は、他の生活時間との兼ね合いで決まるものでもある。たとえば、仕事や家事が長時間に及ぶのであれば、それだけ他の時間を減らさざるを得ないだろう。

●家族との会話時間は、男性<女性、未婚<既婚

性別ならびに既婚未婚別に、テレビの視聴時間、インターネットをする時間、家族との会話時間の平均を示したものが、表1-1-4

である。

これによると、いずれの時間についても、女性のほうが費やす時間が長いことがわかる。とくに、テレビの視聴時間（男性1時間47分<女性2時間37分）と、家族との会話時間（男性51分<女性1時間43分）については、50分程度もの差がある。

次に、既婚未婚による違いである。差が顕著なのは、家族との会話時間で、既婚者のほうが1時間以上も長い（未婚43分<既婚1時間51分）。また、違いは20分程度ながら、テレビの視聴時間は、既婚者のほうが長い。一方、インターネットをする時間については、未婚者のほうがわずかに長い。

さらに、性別と既婚未婚を組み合わせると結果をみたものが、表1-1-5である。これから、さらにいくつかのことがわかる。

第一に、家族との会話時間は、男性未婚者がわずか30分と圧倒的に少ない。

第二に、テレビの視聴時間は、女性既婚者が2時間55分と長い。これは、女性未婚者（2時間10分）よりも長い。同じ既婚者でも、男性の場合だと、未婚者よりも短いこととは対照的である（男性未婚1時間53分>男性既婚1時間38分）。

第三に、インターネットをする時間は、男性既婚者が1時間16分と圧倒的に少ない。これも女性の場合は、わずかながら既婚者のほうが未婚者よりも長いこととは対照的である。

このように、テレビの視聴時間とインターネットをする時間は、性別によって、既婚未婚の関連性が反対になる結果がみられた。これは、女性既婚者には専業主婦が含まれてい

ることや、男性既婚者には仕事時間が長い正規社員が多いこと（p.5、p.16～17、p.62～63を参照）などが関係していると思われるが、興味深いところである。

●家族との会話時間が2時間半近くと長い専業主婦

最後に、就業形態別に、テレビの視聴時間、インターネットをする時間、家族との会話時間の平均を示したものが、表1-1-6である。

これによると、いずれの時間についても費

やす時間がもっとも短いのは、正規社員である。これは、前にみたように、仕事時間が長いことが影響しているだろう。

一方、これらに費やす時間が長い傾向がみられるのが、無職と専業主婦である。これは、家庭にいる時間が長いためだろう。専業主婦の大きな特徴は、家族との会話時間が2時間26分と長いことである。また、テレビの視聴時間の平均も3時間17分ともっとも長い。無職は、インターネットをする時間が3時間15分ともっとも長く、テレビの視聴時間も長い（3時間01分）。しかし、家族との会話時間は1時間15分と、有職者とそれほど変わらない。

表1-1-4 テレビの視聴時間、インターネットをする時間、家族との会話時間（平均）
（性別、既婚未婚別）

	男性	女性	未婚	既婚
テレビの視聴時間	1時間47分	2時間37分	2時間00分	2時間23分
インターネットをする時間	1時間42分	2時間00分	1時間57分	1時間45分
家族との会話時間（電話を含む）	51分	1時間43分	43分	1時間51分

表1-1-5 テレビの視聴時間、インターネットをする時間、家族との会話時間（平均）
（性別×既婚未婚別）

	男性		女性	
	未婚	既婚	未婚	既婚
テレビの視聴時間	1時間53分	1時間38分	2時間10分	2時間55分
インターネットをする時間	2時間01分	1時間16分	1時間52分	2時間05分
家族との会話時間（電話を含む）	30分	1時間21分	1時間00分	2時間12分

表1-1-6 テレビの視聴時間、インターネットをする時間、家族との会話時間（平均）
（就業形態別）

	正規社員	非正規社員	自営自由業	無職	専業主婦
テレビの視聴時間	1時間45分	2時間08分	2時間07分	3時間01分	3時間17分
インターネットをする時間	1時間27分	1時間55分	2時間16分	3時間15分	2時間20分
家族との会話時間（電話を含む）	53分	1時間11分	1時間23分	1時間15分	2時間26分

注) ■ は各項目における最小値、■ は最大値を示す。

第2節

ふだんの生活行動

男女とも、未婚者より既婚者のほうが、趣味・スポーツなどの自分のための生活行動が少ない反面、食生活を豊かに感じている。家事への取り組みは男女差が大きく、とくに女性は結婚すると料理や掃除・洗濯といった家事を行う割合が急増する。

日頃の生活を考えてみると、食事や家事、趣味活動や交友、社会活動など、若者の生活場面はさまざまである。前節では、「時間」という観点から生活の様子をみたが、本節では、いくつかの生活上の「場面」に焦点をあててみていきたい。

●「食事の時間を楽しいと思う」「決まった時間にきちんと食事をする」が8割

ふだんの生活の様子について、全体での結果を示したものが、図1-2-1である。ここでは「ある」（「よくある」＋「ときどきある」、以下同）の回答が多かった順に示してある。

これによると、「食事の時間を楽しいと思う」「決まった時間にきちんと食事をする」は8割前後にのぼり、もっとも多い。「掃除や洗濯をする」「料理をする」といった家事について、「ある」と回答した割合は6～7割程度であった。

「趣味やスポーツを楽しむ」「デパートなどで買い物をする」「友だちと会う」「読書をする（マンガや雑誌を除く）」といった、趣味や交友にかかわる項目については、5～6割台である。これらについては、「よくある」の割合は比較的低いが、「ときどきある」の割合が高い特徴がみられる。家事などと比べ

ると、それほど頻繁に行うわけではないが、折にふれ行っている生活行動と考えられる。

こうした食事や家事、趣味や交友といった活動に比べて、「自分の能力を高めるための勉強をする（資格取得やお稽古事など）」といった能力開発については4割弱にとどまる。さらに、「ボランティア活動をする」は1割にも満たなかった。

●男女差が大きい家事の取り組み

さらに詳しくみてみよう。ふだんの生活の様子について、性別に分けて示したものが、図1-2-2である。これによると、「ある」と回答している割合は、大半の項目で女性のほうが高い。

なかでも「掃除や洗濯をする」（男性52.0%＜女性86.3%）、「料理をする」（男性39.0%＜女性81.8%）といった家事についての項目では、非常に差が大きい。また、「デパートなどで買い物をする」（男性49.7%＜女性66.7%）、「友だちと会う」（男性47.9%＜女性63.2%）でも、女性のほうが20ポイント近く「ある」と回答した割合が高かった。さらに、「食事の時間を楽しいと思う」「決まった時間にきちんと食事をする」といった食事に関する項目でも、女性のほうが10ポイント以上高い。

図1-2-1 ふだんの生活ですること

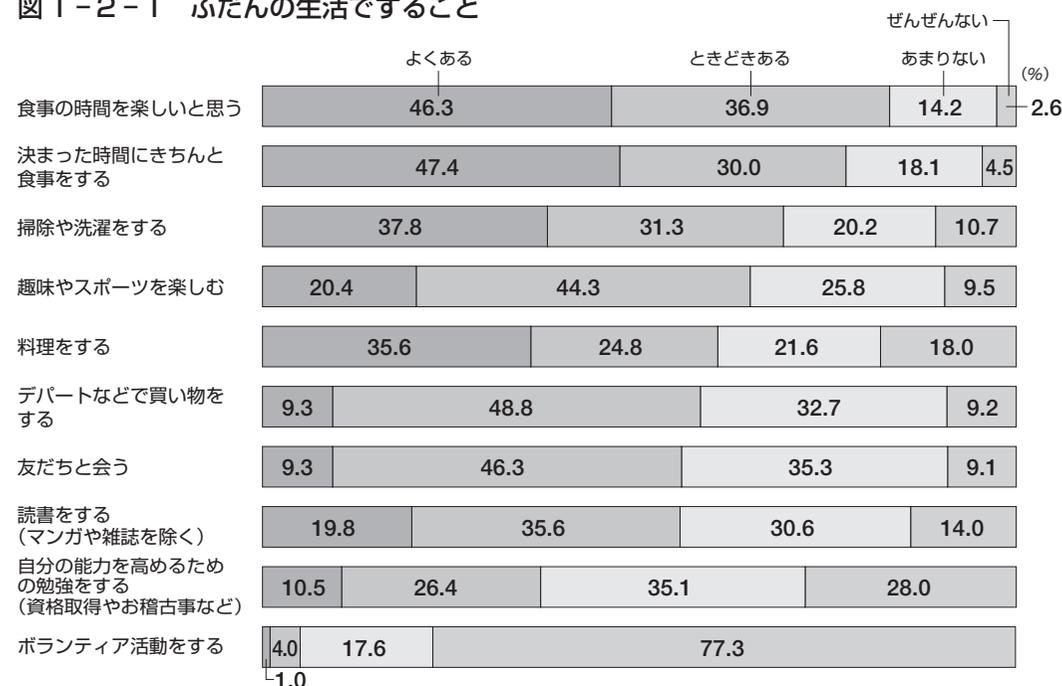
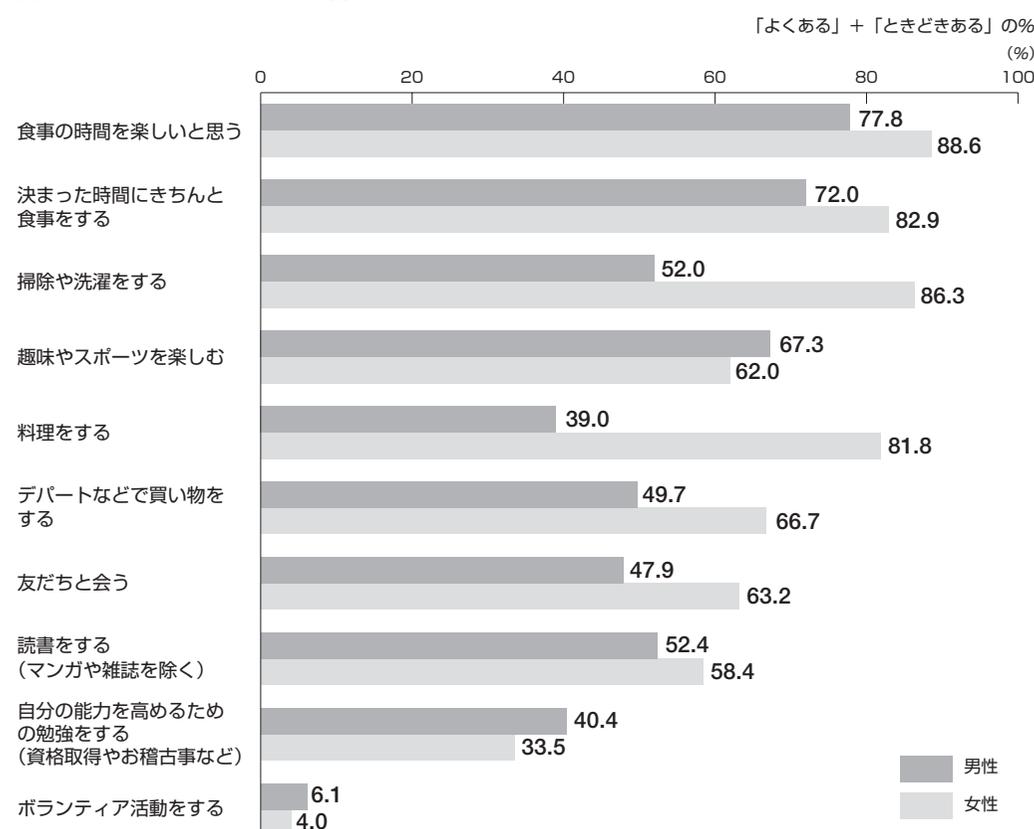


図1-2-2 ふだんの生活ですること (性別)



●結婚すると、女性は、家事を行う割合が著しく増加

こうした違いには、結婚の状況も影響していると考えられる。そこで、ふだんの生活の様子を、性別ごとの既婚未婚別に分けて示したものが、図1-2-3である。

はじめに、性別による差が非常に大きかった家事についてみてみよう。これによると、「料理をする」割合は、男性だと既婚未婚による差がみられない（男性未婚39.3%、男性既婚38.7%）。一方、女性では既婚未婚による差が非常に大きい（女性未婚62.8%<女性既婚95.1%）。

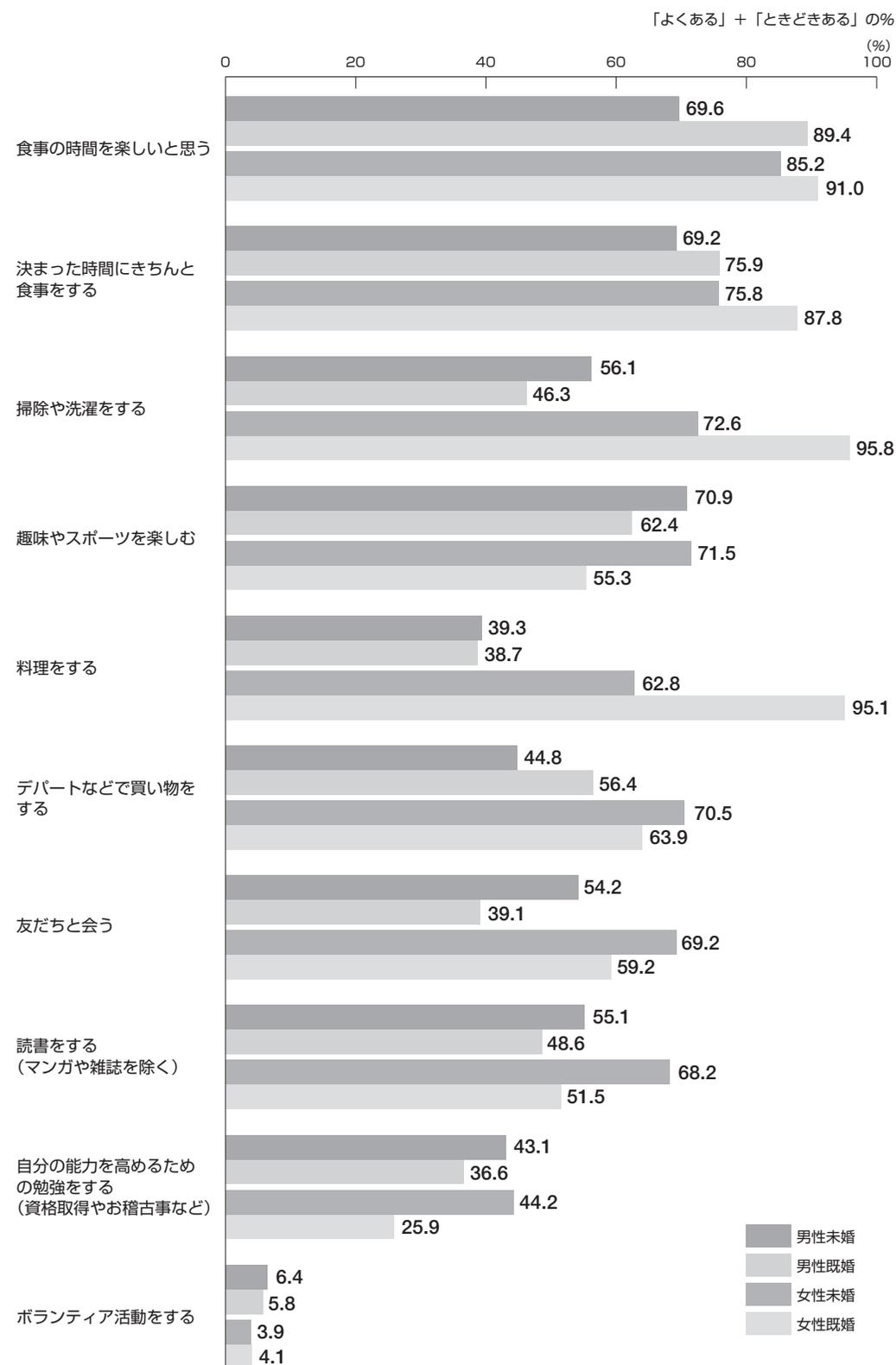
また、「掃除や洗濯をする」についても、男性だと未婚者で56.1%、既婚者で46.3%と、未婚者のほうが10ポイント程度「ある」と回答した割合が高い。一方、女性だと未婚者で72.6%、既婚者で95.8%と、圧倒的に既婚者のほうが高い。このように、家事については、結婚との関連が大きく、その様子は性別によって異なっている。

●結婚すると、性別を問わず、自分のための生活行動が少なくなる反面、食生活が豊かに

次に、「趣味やスポーツを楽しむ」「友達と会う」「読書をする」「自分の能力を高めるための勉強をする」については、性別を問わず、未婚者のほうが既婚者よりも「ある」と回答した割合が高い。趣味や交友、さらには能力開発といった、いわば自分のための生活行動については、未婚者のほうが既婚者よりも時間をあてることができるのだろう。

これとは反対に、「食事の時間を楽しいと思う」「決まった時間にきちんと食事をする」といった食事に関する項目については、性別を問わず、未婚者よりも既婚者のほうが高い傾向にある。食事の時間の困らんや生活リズムと、結婚との関連を示すものと考えられ、興味深い。

図1-2-3 ふだんの生活ですること（性別×既婚未婚別）



第3節

日頃の人間関係

1. 友だち関係

友だち関係を肯定的に評価している割合は、男性より女性のほうが高い。就業形態別にみると、友だち関係に対する無職の評価が低い。一方、専業主婦は高い評価をしている。

若者たちは、さまざまな人間関係の中で、いろいろな影響や手助けを受けたり、あるいは逆に影響を与えたりもしているだろう。本節では、こうした人間関係についてみることにする。今回の調査では、友だち、親、パートナー（配偶者や恋人）に絞って質問を行った。まずは、友だち関係からみていきたい。

友だちとの関係については、友だちの数、深いつきあいの友だちの存在、友だち関係の多様さ、全体的な満足感、という4つの観点から、若者の認識をたずねた。

●男女で認識に違いのある友だち関係

まず、全体の傾向からみておこう。「そう」（「とてもそう」＋「まあそう」、以下同）の割合でみると、「友だちとの関係に満足している」が70.4%、「いろいろなタイプの友だちがいる」が65.3%、「悩み事を相談できる友だちがいる」が63.3%、「仲のよい友だちが多い」が50.7%であった（図1-3-1）。

性別ごとに、「そう」と回答した割合を示したものが、図1-3-2である。これによると、全般的に女性のほうが友だち関係への評価が高いことがわかる。もっとも差がみられたのが「悩み事を相談できる友だちがいる」で、男性53.3%<女性73.2%と、約20ポイントの差がある。

また、「いろいろなタイプの友だちがいる」でも、男性58.9%<女性71.7%と、12.8ポイントの差がみられた。全体的にみて、男性より女性のほうが、友だち関係に対して肯定的な認識をもっているようである。

●友だち関係に肯定的な評価をする割合が低い無職

次に、就業形態別に友だち関係の様子をみたものが、図1-3-3である。これによると、正規社員、非正規社員、自営自由業といった有職者の中では、10ポイントを超えるような大きな違いはみられない。

しかし、無職をみると、どの項目においても、「そう」と回答する割合が低かった。一方、専業主婦では、「仲のよい友だちが多い」に関しては、有職者とあまり変わらないものの、「友だちとの関係に満足している」「いろいろなタイプの友だちがいる」「悩み事を相談できる友だちがいる」については、相対的に評価が高い。なお、回答は自己評価であり、必ずしも友だち関係の実態を反映しているものではないが、無職の評価が全体的に低い傾向が特徴的と言えるだろう。

図1-3-1 友だちとの関係

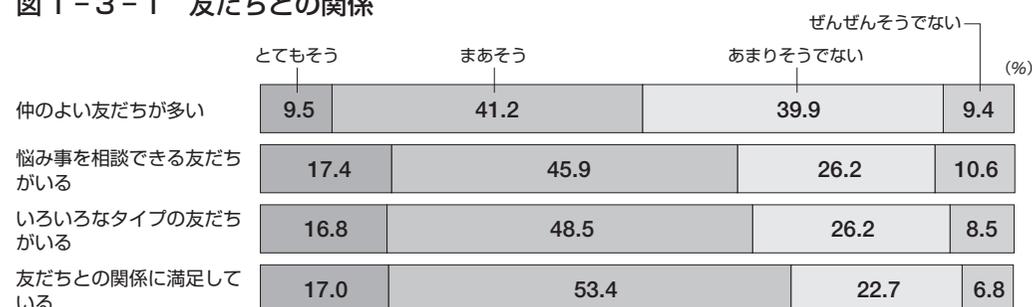


図1-3-2 友だちとの関係（性別）

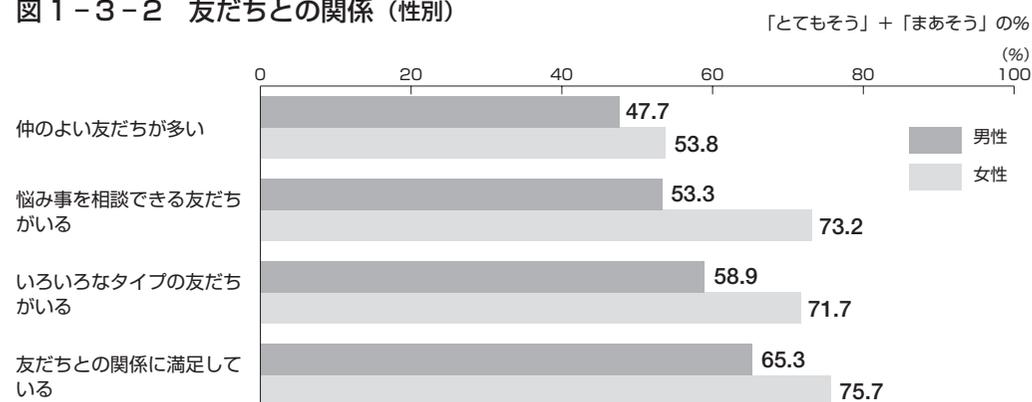
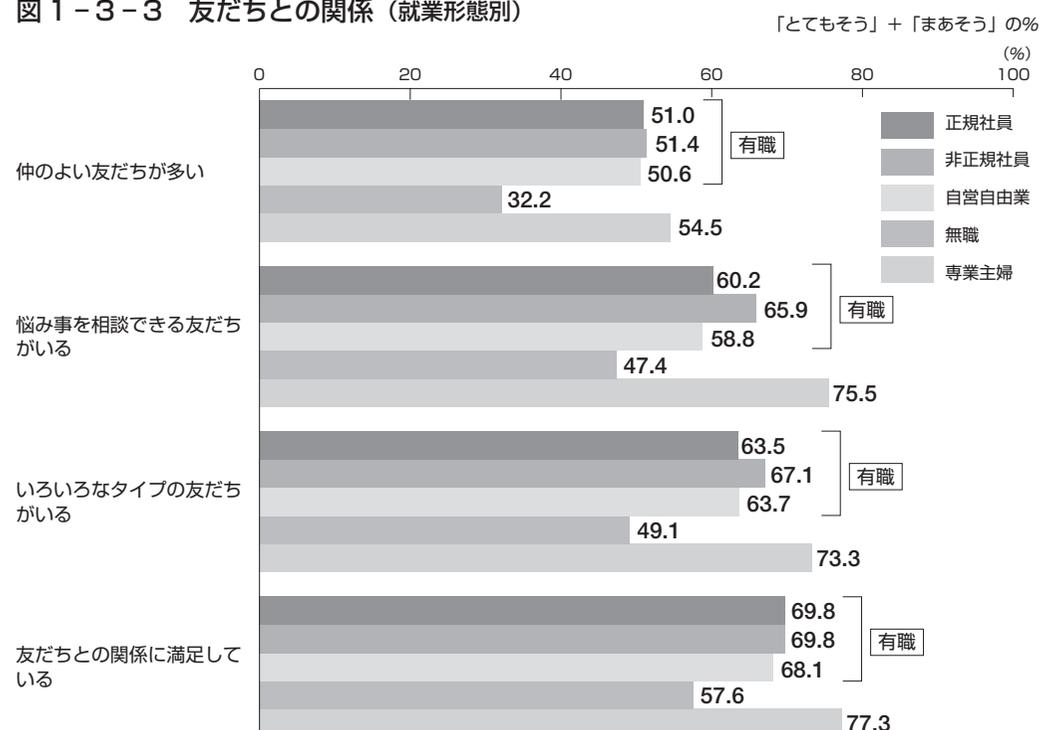


図1-3-3 友だちとの関係（就業形態別）



2. 親子関係

男性よりも女性のほうが、親とよく話をし、悩み事も相談しているなど、親子関係に肯定的な評価をしている。また、就業形態別にみると、無職は親から「信頼されていると思う」と回答した割合が低い。

子どもの頃とは異なるものであると考えられる成人の親子関係。若者たちは、親とどのような関係にあるのだろうか。

親との関係については、会話の頻度、つきあいの深さ（悩み事の相談）、親からの信頼感、全体的な満足度という4つの観点から、認識をたずねた。

●女性のほうが、親とよく話をし、悩み事も相談している

全体の結果からみると、もっとも「そう」（「とてもそう」＋「まあそう」、以下同）と回答した割合が高かったのは、「親との関係

に満足している」で73.0%。つづいて「信頼されていると思う」が70.4%、「よく話をする」が61.8%となっていた。一方、「悩み事を相談する」のは34.4%とほぼ3人に1人である（図1-3-4）。

図1-3-5は、親子関係について、性別でみたものである。これからわかるように、どの項目でも女性のほうが男性より、「そう」と回答する割合が高い。とくに「悩み事を相談する」（男性22.8%＜女性46.0%）、「よく話をする」（男性50.5%＜女性73.0%）で差が大きい。女性のほうが、親とのコミュニケーションが密であることが推測される。

図1-3-4 親との関係

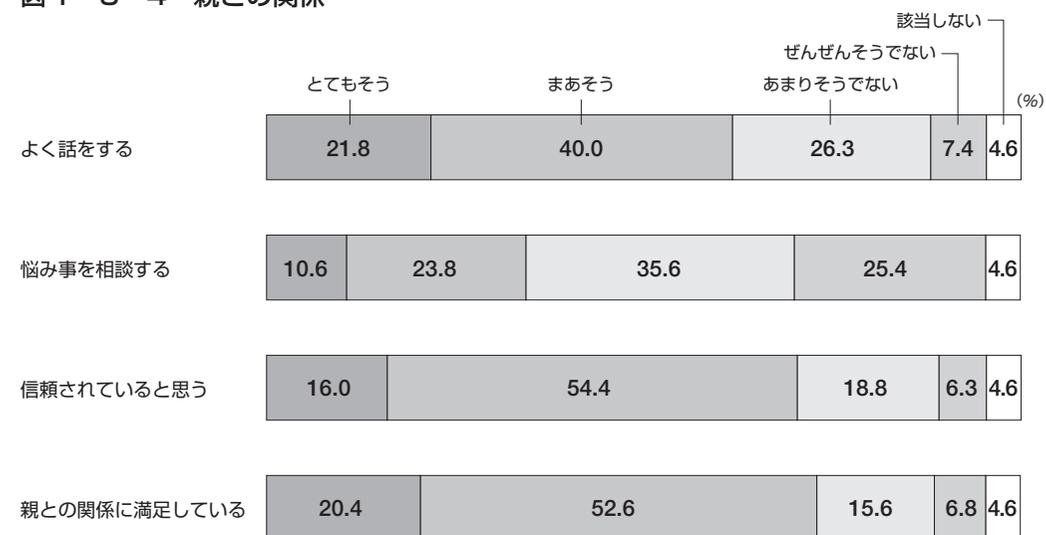
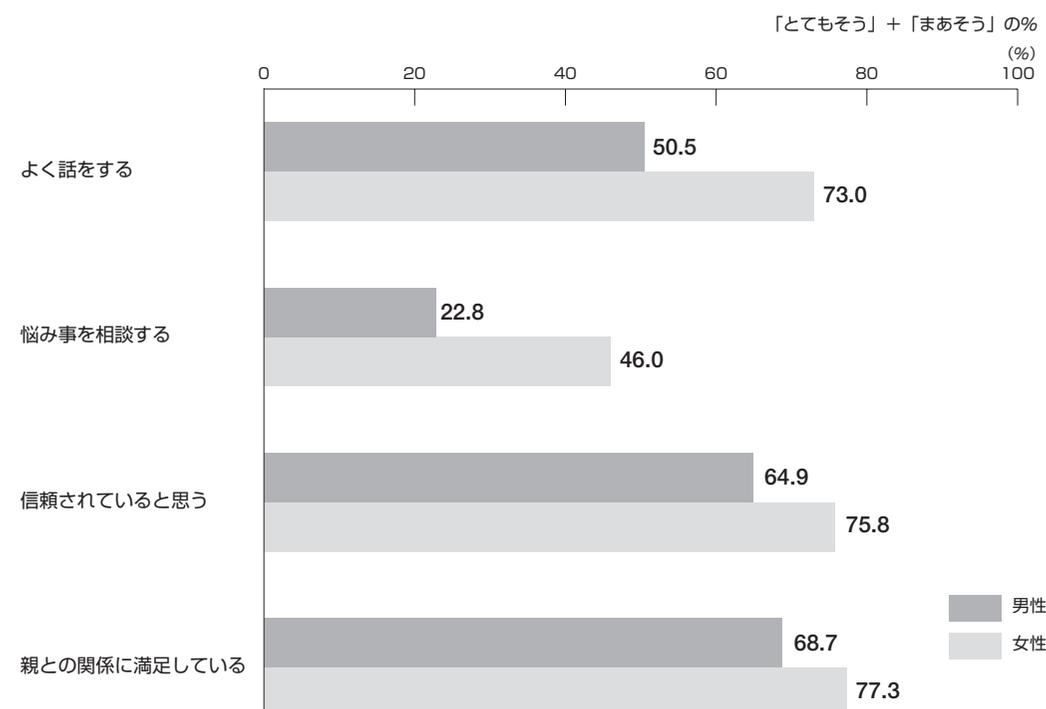


図1-3-5 親との関係（性別）



このように、女性の評価が高い親子関係だが、男性に特徴的な結果もみられた。性別ごとに、さらに既婚未婚を分けたものが、図1-3-6である。これによると「信頼されていると思う」については、男性未婚者だと57.9%だが、男性既婚者だと74.8%と16.9ポイントも高くなっている。また、「親との関係に満足している」は、男性未婚者だと64.7%だが、男性既婚者では74.3%と、9.6ポイント高くなっている。女性だとこれほどの差はみられない。とくに男性の場合には、結婚の状況が親子関係の捉え方に関係しているようだ。

●無職は、親から「信頼されていると思う」と回答する割合が低い

次に、就業形態別に親子関係をみたものが図1-3-7である。これによると、専業主婦はどの項目においても評価が高い。また、無職は、親と「よく話をする」と回答した割合は66.1%と比較的高い。しかし、親から「信頼されていると思う」との回答は48.3%と低い。若者自身の認識ではあるものの、就業の有無が、親子関係の捉え方に関係しているようだ。

図1-3-6 親との関係（性別×既婚未婚別）

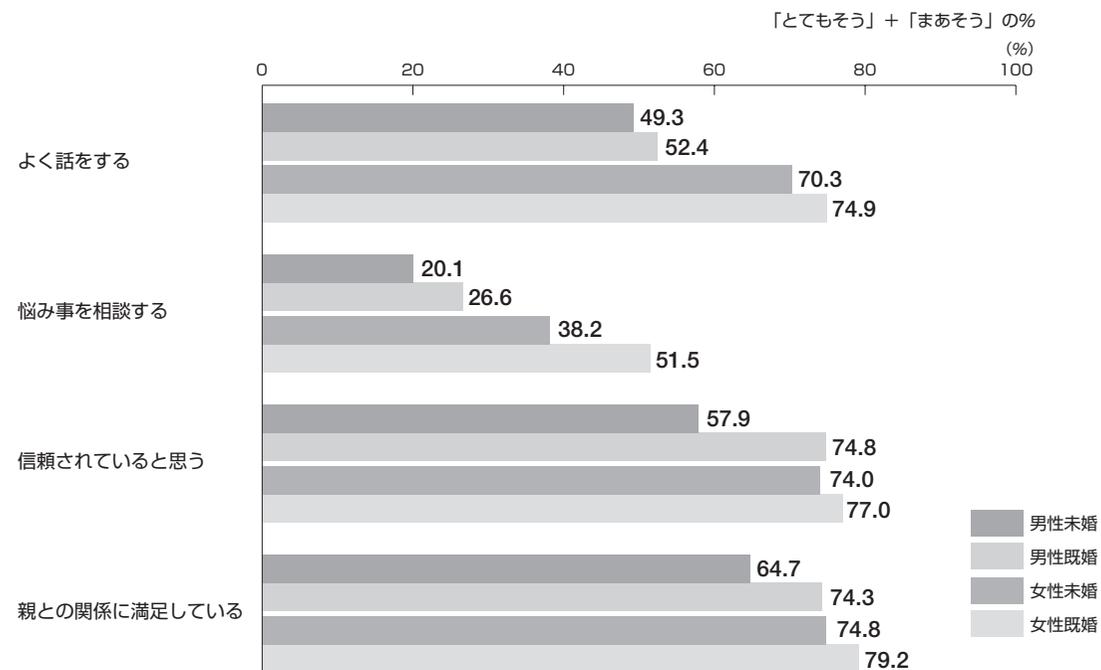
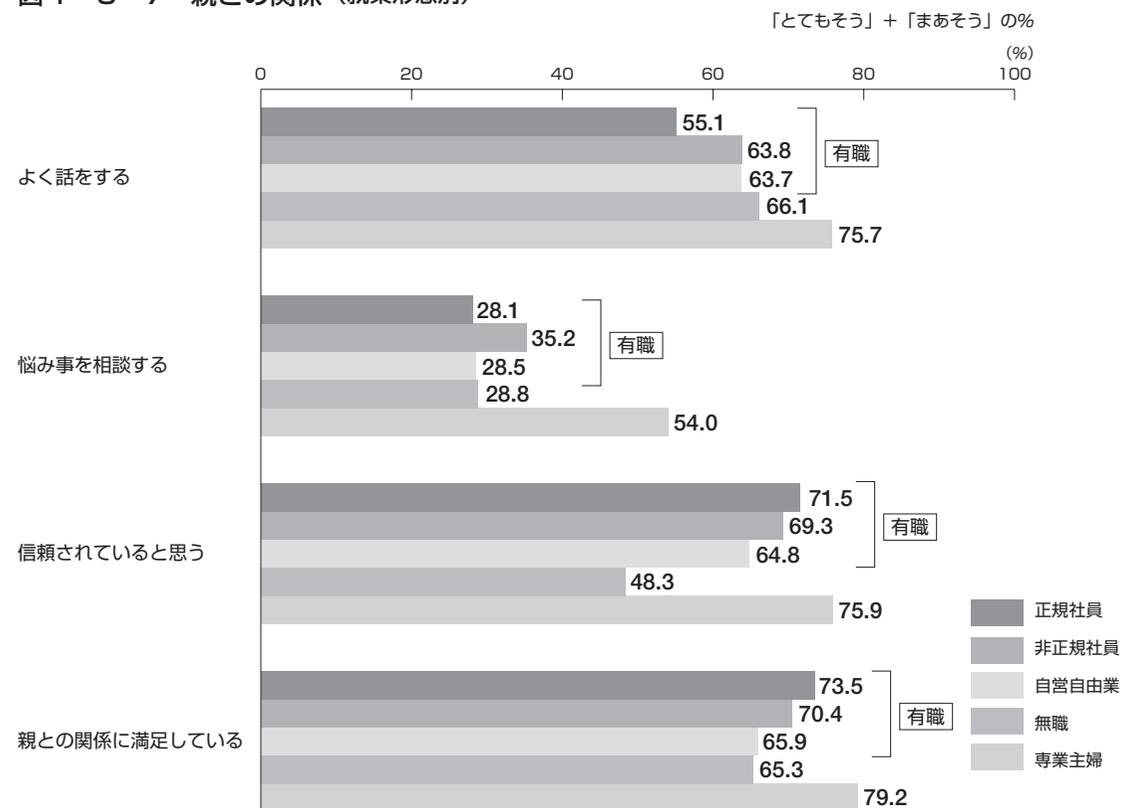


図1-3-7 親との関係（就業形態別）



3. パートナーとの関係

未婚者のうちパートナーがいる割合は約4割。男性未婚者より女性未婚者のほうが、パートナーがいる割合が高い。パートナーとの関係は、既婚者・未婚者とも全体的に良好。ただし、パートナーがいる未婚の男性は「悩み事を相談する」割合が6割程度と、相対的に低い。

友だちや親に加えて、若者にとって重要な関係を結んでいる相手として、パートナーがあげられる。パートナーとは、既婚者の場合は配偶者、未婚者の場合には恋人のことを指している。

そこで、パートナーとの関係についてどう感じているか、会話の頻度、つきあいの深さ(悩み事の相談)、パートナーからの信頼感、全体的な満足度という4つの観点から、認識をたずねた。

●パートナーがいる未婚者は約4割、男性未婚者だと39.0%、女性未婚者だと47.3%

まず、パートナーの有無について押さえておこう。パートナーとの関係についての設問では、パートナーがいない場合には「該当しない」を選択してもらった。そこで、各項目に「該当しない」と回答した割合(28.7%)から、全体では71.3%の若者にパートナーがいるということがわかる。

ただしこの数値には、既婚者も含まれている。そこで、未婚者に限ってみると、パートナーがいる割合は42.4%になる。また、性別に分けると、男性未婚者の場合で39.0%、女性未婚者の場合で47.3%と、女性のほうがパートナーがいる割合が高い(図1-3-8)。

さらに、未婚の男女について、就業形態を分けてパートナーのいる割合をみると、男性の場合は、正規社員で42.0%、非正規社員で

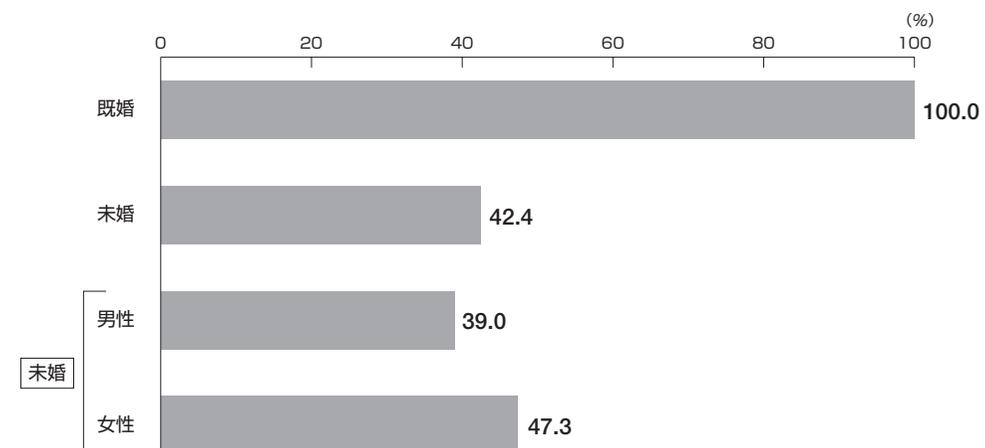
32.5%、自営自由業で40.2%、無職で20.3%。女性の場合は、正規社員で50.6%、非正規社員で43.4%、自営自由業で51.9%、無職で40.0%となっており、いずれも無職では低い傾向にあるようだ(図表省略)。

●パートナーとの関係は全体に良好だが、未婚の男性は「悩み事を相談する」割合が低い

さて、パートナーとの関係をどう感じているかをみてみよう。図1-3-9は、性別ごとに、さらに既婚未婚を分けて、「そう」(「とてもそう」+「まあそう」、以下同)と回答した割合を示したものである。なお、ここでは、パートナーのいる若者に限って分析を行った。性別や既婚未婚を問わず、どの項目でも「そう」という回答が多いが、いくつかの特徴があげられるだろう。

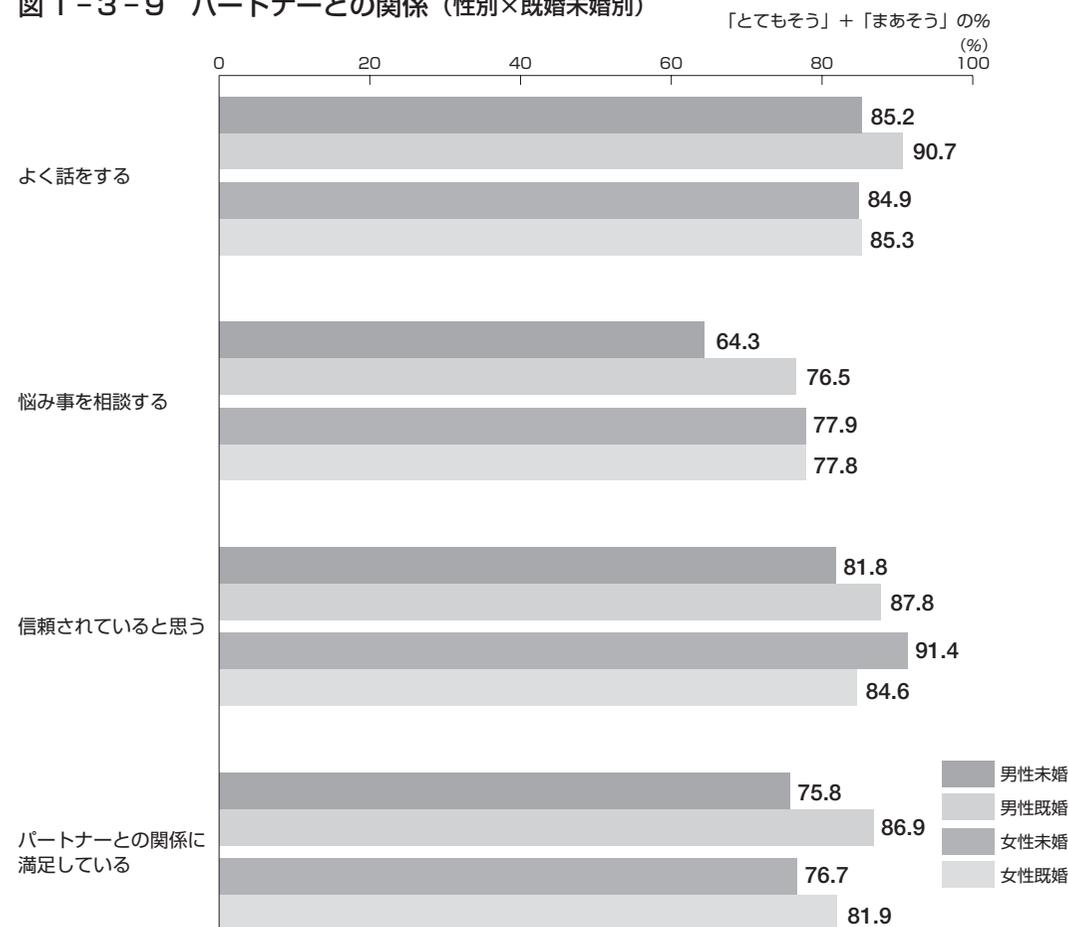
第一に、「悩み事を相談する」について、男性未婚者が低い(64.3%)。これは既婚者に比べて10ポイント以上も低い。一方、女性では既婚未婚による差はみられない。第二に、性別を問わず、「パートナーとの関係に満足している」割合は、未婚者よりも既婚者で高い傾向がみられる。とくに男性では、未婚者で75.8%、既婚者で86.9%と10ポイント以上の差がみられる。結婚しているかどうかはパートナーとの関係の認識に及ぼす影響は、男性のほうが大きいかもしれない。

図1-3-8 パートナーの有無



注) 「パートナーがいる」割合。パートナーとの関係についての設問で「該当しない」と回答した結果から算出。

図1-3-9 パートナーとの関係(性別×既婚未婚別)



注1) パートナーがいる者のみ分析(パートナーとの関係についての設問で、「該当しない」以外の選択肢に回答した場合)。
注2) パートナーがいる者の実数は以下の通り。男性未婚285名、男性既婚519名、女性未婚244名、女性既婚734名。

第4節

生活にかかわる意識

1. 現在の生活について思うこと

現在の生活に「満足している」割合は、有職者では就業形態を問わず5割程度。この割合は無職だとわずか2割だが、専業主婦だと7割である。また、未婚者よりも、既婚者のほうが「満足している」割合が高い。

本節では、現在の生活の状況について若者がどのように感じているのか、生活にかかわる意識をみていこう。まずは、経済的なゆとりや時間的なゆとり、さらにはこれからの生活への期待といった、生活全般に対する評価をみることにする。

●時間的なゆとりの感じ方は、就業形態による差が大きい

はじめに、全体の傾向をみておこう。「とてもそう」と「まあそう」の合計でみると、もっとも高かったのは「これから先の生活が楽しみだ」の52.1%で、次いで「健康に自信がある」が49.9%で続く。さらに、「時間的なゆとりがある」が44.0%、「充実した余暇を送っている」が40.7%で、以下、「経済的なゆとりがある」(36.7%)、「理想に近い生活を送っている」(30.1%)となっていた(図1-4-1)。

では、こうした現状評価について、就業形態による違いはみられるだろうか。表1-4-1をみてみよう。第一に、有職者の中で比べると、正規社員は「時間的なゆとりがある」と回答する割合が低い一方で、「経済的なゆとりがある」と回答している割合は高い。

第二に、無職をみると、「時間的なゆとりがある」との回答が83.9%と、他の就業形態に比べて圧倒的に高い。一方、これ以外の項目に対して肯定的な回答をしている割合は総じて低い。第三に、専業主婦は「これから先の生活が楽しみだ」(62.7%)、「理想に近い生活を送っている」(46.4%)など、全般的に肯定的な評価が高いことがわかる。

●これからの生活が楽しみなのは、未婚者40.8%、既婚者63.2%

生活全般に対する評価について、さらに既婚未婚別にもみてみよう(表1-4-1)。これによれば、全体的にみて、未婚者よりも既婚者のほうが肯定的な回答をしている割合が高い。

とくに、「理想に近い生活を送っている」に「そう」(「とてもそう」+「まあそう」、以下同)と回答した割合は、未婚者では20.1%なのに対し、既婚者では40.1%になっている。また、「これから先の生活が楽しみだ」でも、未婚者で40.8%、既婚者で63.2%と大きく差がついており、現在あるいは将来に対して肯定的な認識をもっている割合は、既婚者のほうが明らかに高いようだ。

図1-4-1 現在の生活について思うこと

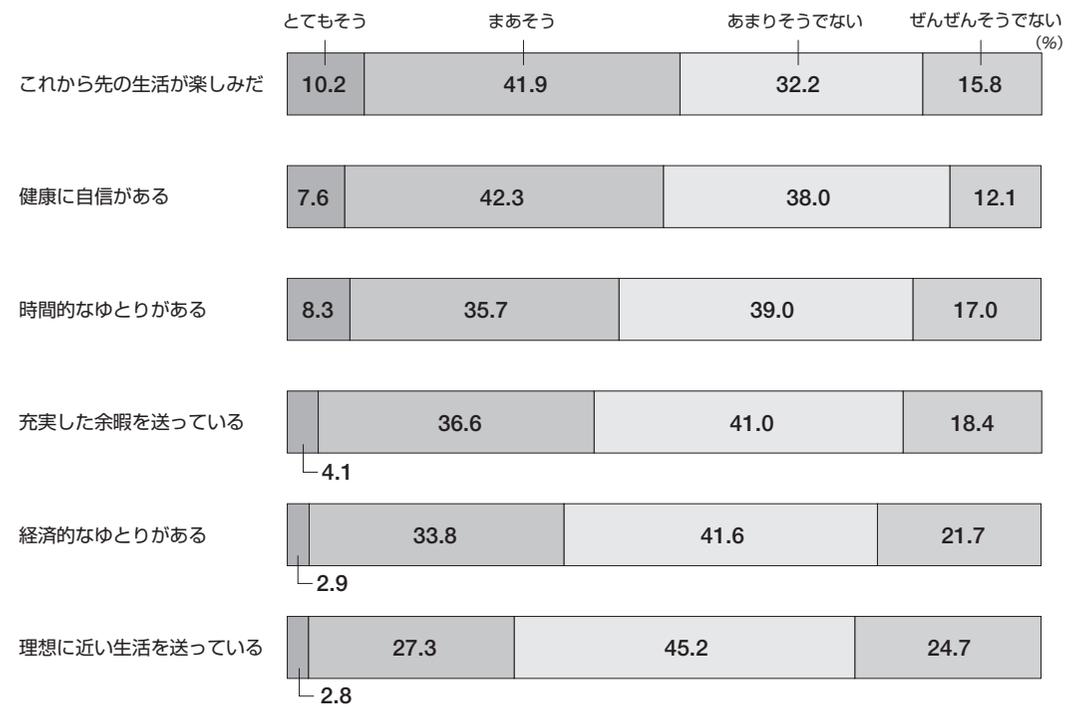


表1-4-1 現在の生活について思うこと (就業形態別、既婚未婚別)

項目						(%)	
	正規社員	非正規社員	自営自由業	無職	専業主婦	未婚	既婚
これから先の生活が楽しみだ	51.2	49.4	50.0	30.5	62.7	40.8	63.2
健康に自信がある	52.0	49.0	45.0	24.5	54.4	46.3	53.5
時間的なゆとりがある	34.6	45.9	46.2	83.9	57.7	43.3	44.9
充実した余暇を送っている	40.3	40.1	35.2	32.2	47.7	35.9	45.4
経済的なゆとりがある	43.3	25.8	31.3	15.2	38.0	33.6	39.8
理想に近い生活を送っている	27.4	24.9	30.8	13.6	46.4	20.1	40.1

注1) 「とてもそう」+「まあそう」の%。
注2) 濃い色は就業形態別における各項目の最大値、薄い色は最小値を示す。

●生活に「満足している」割合は、有職者間での差はあまりみられず、専業主婦で高く、無職は低い

次に、総合的な評価についてみてみたい。図1-4-2は、生活の総合的な満足度について、全体および就業形態別に示したものである。

まず、全体でみると、55.1%の若者が「満足している」（「とても満足している」＋「まあ満足している」、以下同）と回答している。現在の生活に満足を感じている若者と、不満を感じている若者はほぼ半々ずつのようである。

次に、就業形態別では、3つのことが見て取れる。第一に、有職者の中でみると、正規社員、非正規社員、自営自由業の間では、生活の満足度についての差はみられない。第二に、無職の満足度が低い。無職で「満足している」と回答した割合は、22.8%にとどまっている。これは、4人から5人に1人程度である。そして第三に、専業主婦で「満足している」割合が非常に高い（72.9%）。こうし

た結果からみると、就業形態というよりも、むしろ就業の有無によって、生活に対する満足度が大きく異なっていると考えられる。

●女性既婚者は生活に「満足している」割合が高い。男性既婚者がそれに続く

では、性別や結婚の状況によって、相違はみられるだろうか。図1-4-3によると、未婚者で「満足している」のは42.9%、既婚者は67.3%と、24.4ポイントもの差がついている。

性別ごとの既婚未婚別にみると、さらに違いがみられる。「満足している」という回答が多いのは、女性既婚者で71.9%。次いで、男性既婚者が60.6%である。一方、女性未婚者は51.0%とほぼ半数で、男性未婚者では37.1%にとどまる。

前にみた「理想に近い生活を送っている」「これから先の生活が楽しみだ」といった点も含め、生活の満足度と、結婚しているかどうかには大きな関連があるようだ。

図1-4-2 生活の総合的な満足度（全体、就業形態別）

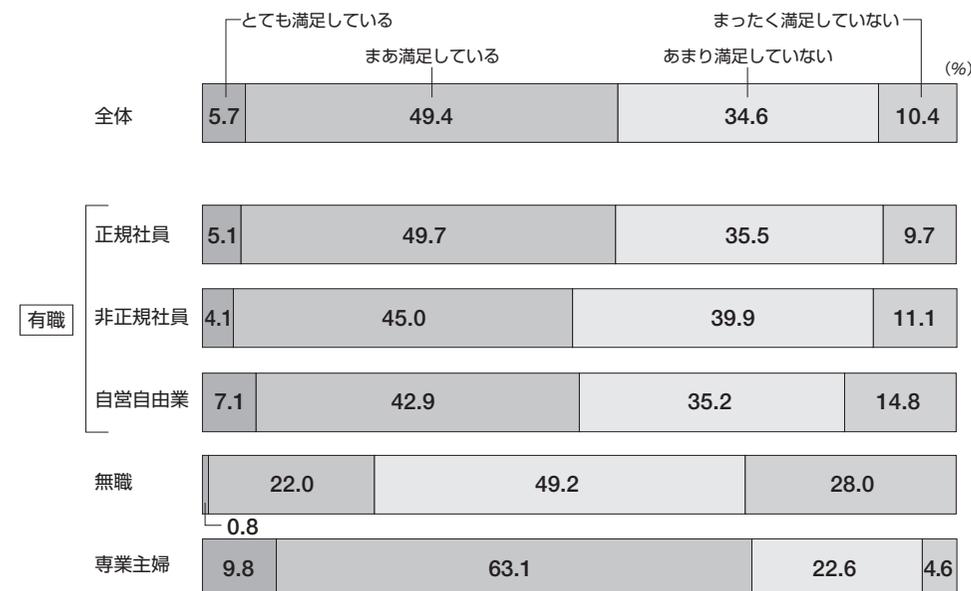
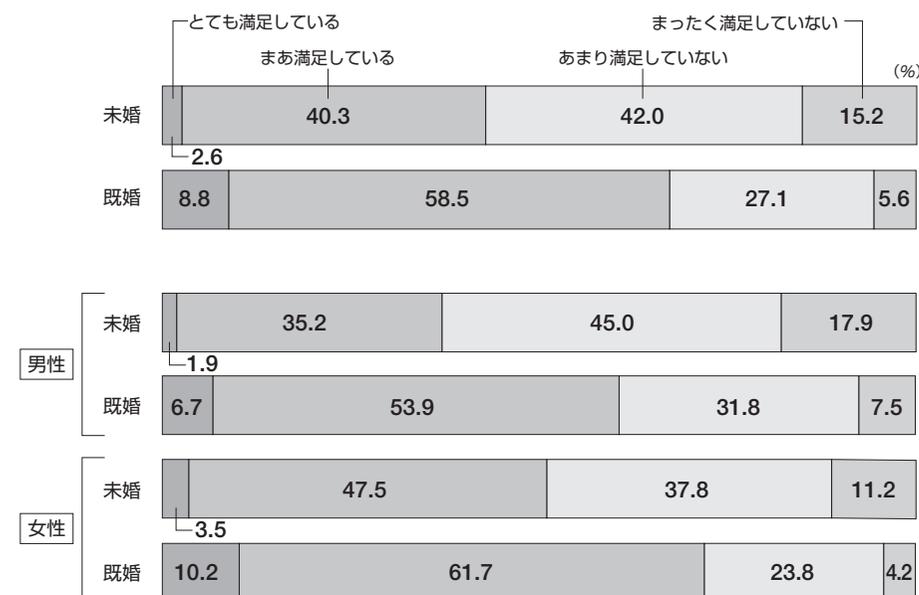


図1-4-3 生活の総合的な満足度（既婚未婚別、性別×既婚未婚別）



2. 価値観

「学校を卒業したらすぐに就職するのがよい」という考え方に対しては、賛否がほぼ半々ずつ。就業形態別にみると、正規社員と専業主婦で、こうした考え方に同意する割合が高い。

●「学校を卒業したらすぐに就職するのがよい」という考え方は、肯定と否定が二分される

図1-4-4は、価値観についてたずねた4項目の結果を示したものである。肯定される割合がもっとも高かったのは、「学校を卒業したらすぐに就職するのがよい」という考え方で、「そう思う」（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同）という回答は48.3%であった。

これとは反対に、肯定される割合が低かったのは「男性は外で働き女性は家庭を守るのがよい」で、「そう思う」と回答した若者は15.3%にとどまり、「そう思わない」（「あまりそう思わない」＋「ぜんぜんそう思わない」）と回答した若者が52.7%と半数以上にのぼった。

●性別や既婚未婚別では、価値観にあまり大きな違いはみられない

こうした価値観は、性別あるいは結婚の状況との関連も考えられる。そこで、性別に分けて違いをみたところ、「男性は外で働き女性は家庭を守るのがよい」に「そう思う」と回答した割合は、男性だと18.7%なのに対し、女性では11.9%と、6.8ポイントの差がみられた。しかし、そのほかの項目での差はあまりみられない。価値観レベルでの性差はあまりみられないようだ（巻末基礎集計表参照）。

次に既婚未婚別に価値観の違いをみた。これによると、「学校を卒業したらすぐに就職するのがよい」に「そう思う」と回答した割

合は、既婚者だと52.1%、未婚者だと44.6%と7.5ポイントの差がみられたものの、それ以外の項目では差があまりみられなかった（巻末基礎集計表参照）。結婚をしているかどうかと価値観との間には、あまり関連はないようだ。

●正規社員と専業主婦は、「学校を卒業したらすぐに就職するのがよい」という価値観に同意する割合が高い

就業形態別に価値観の違いをみたものが、図1-4-5である。これによると、「学校を卒業したらすぐに就職するのがよい」での差が目立つ。「そう思う」と回答した割合は、正規社員で51.2%、専業主婦で51.4%と半数を超えている。これに対して、非正規社員は45.4%、無職は39.0%、そして自営自由業は36.2%と、その割合は低くなっている。

そのほかの項目ではこれほどの差はみられないものの、「仕事のためにプライベートを犠牲にするのは仕方ない」については、無職が18.6%なのに対し、自営自由業は29.1%と、10ポイント以上の差がある。

こうした就業による価値観の違いは、現在の就業形態に就いた結果として生じた（あるいは強化された）という側面と、そもそもこうした価値観をもっていた結果として、現在の就業形態が選ばれているという2つの解釈が可能である。実際には、どちらの側面もあると考えられ、判別は難しいが、こうした価値観と就業形態との間に関連があるということと言えるだろう。

図1-4-4 価値観

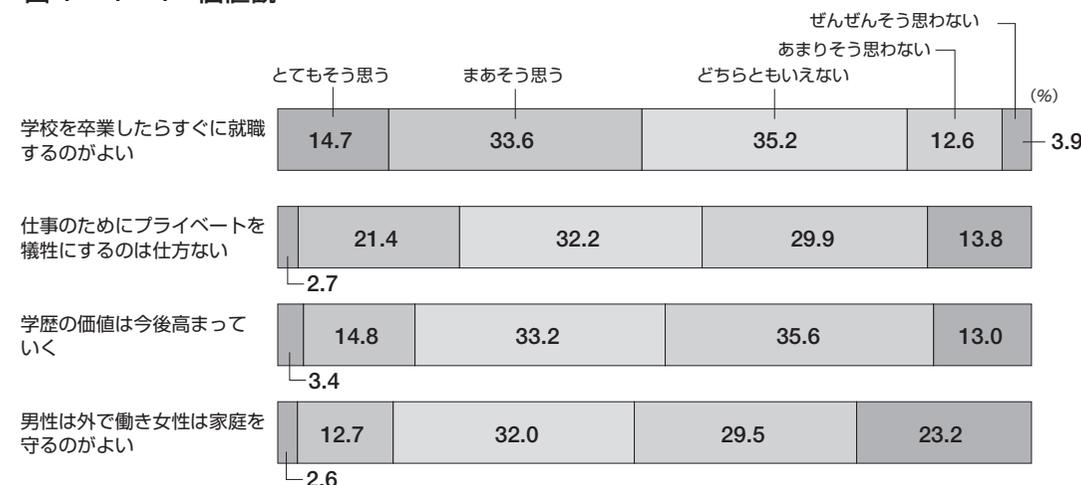


図1-4-5 価値観（就業形態別）

